
異世界・オーリエン

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界・オーリエン

【Nコード】

N4257A

【作者名】

サイキアスカ

【あらすじ】

真紅^{しんく}は、普通の人間みただけど、ぜんぜん違う！なんと真紅は・・・。そして真紅は、異世界・オーリエンに来る。そこで出会ったのは、少年 キセ。そして、真紅とキセとその仲間たちが繰り広げる、行く先判らない、なぞの物語が始まる！

第一編 1・1（前書き）

不完全って、悲しいよね・・・。

第一編 1 - 1

黄金の膝まである長い髪。

それを、鮮やかな赤いリボンで左右後方両サイドで結っている。

背は、とてもといわんばかりに小さい。

透き通った青い眼に、細い手足。

透明な白い肌。

大人っぽい、白いくしゅっと、しわになっている長袖のトップス。

薔薇の刺繍が目立つ。

短いデニムのスカートの中に、短いズボンをはいている。

彼女 東宝真紅とうほうしんくは、大きな自分の家の敷地にある、池の前にいた。

東宝家は、山を何個も持っているような大きな家柄である。

その中の、令嬢なのだから当然おとなしいイメージを持つ。

いや、それは一時の思い込みなのだ。

全ての令嬢が、おとなしい・物静かだと思っるのは間違っている。

真紅の場合、一度脱走したことがあった。

そのときは、家の者全員で追いかけたが、とうとう捕まらなかった。
まだある。

真紅はなんと、家の周りに、ありえなく深い（大体7〜8m）の落とし穴を10個以上は創った。しかも一晩で。

そして、まだある。

真紅の場合、料理が下手であった。

小さい頃から英才教育を受けてきた真紅。

頭は、小六の体で東大の学力はある。

なのに、料理などの家庭科はどうしてもダメであった。

クッキーでハートを作っても、絶対に岩形になってしまう。しかもマズイ。

家のメイドさんが一度食べた。

すると、そのメイドさんは1ヶ月間苦しんだそうだ。

まだあるが、説明していると、時間も生きている時間も消える。

真紅は、池に写っている月を見ていた。

なぜか、ホンモノよりも面白かったからだ。

風が吹くたびに、月が揺れる。

「・・・様・・・！」

ピクツ、と真紅の体が揺れる。

「お嬢様　！どこですか　！？」

ワイワイとざわつきが近づいてくる。

家の者だ・・・！

真紅はそう思った。

だが、動きはしない。

ここは、絶対に見つからない。

ここは、異世界・オーリエンだからだ。

常人じゃ見つけれない。

真紅がここを見つけたのは「あの日」の直後であった。

「あの日」とは・・・真紅の両親が死んだ日である。

真紅の両親は、まだ、真紅が幼い頃に死んだ。

謎の炎に焼かれ、死んだ。

真紅が、光を失い、彷徨っていた時である。

突然、魔方阵が現れた。

この魔方阵は普通の魔法陣に、もう一つ、周りが付いていた。

真紅が近づいたと同時に、周りが回った。

その瞬間、謎の扉が現れ、それがここへの入り口というわけであった。

「はぁ・・・」

真紅は見飽きたのか、近くの木に腰掛けた。

ホンモノは完全だ。

ニセモノは不完全だ。

真紅はどちらかというと、不完全のほうが好きである。

実際、真紅は普通の人間とは違う。

「失敗作」である。

生まれる前の真紅は、もう、自分の父親の手によって力を埋め込まれていた。

不思議な力・謎の力・可笑しな力。

失敗作は使えない。

そう、真紅は聞こえた。

「？」

どこからか、人の気配がした。

・・・気のせい？

真紅はそう思った。

ガサ・ガササツ！

確かに、人の気配がしたし、音も聞こえた！

真紅は不思議と怖くは無かった。

むしろ、殺人鬼ならば、殺してほしいと思っている。

が、殺人鬼でもなんでもなかった。

ただの 少年であった。

真紅より、1歳ほど大きいらしい。

少年は、オレンジ色の頭をしていて、少し長い髪だ。

眼は、髪の色よりも少し濃い、オレンジ。

服は流行という感じの服であり、真紅を見つけると、大きいフードを深くかぶった。

「・・・誰？」

真紅が聞く。

少年は顔が見えなくても、驚いているようであった。

「オマエ・・・この住人じゃねーだろ・・・むしろ・・・オマエ・・・男・・・？」

「・・・はああ？」

真紅は、眉をしかめた。

「何言ってるの？大丈夫？あたしは、女だよ。正真証明の、ね」

「女・・・・・・？」

「そう、女」

しばらく二人の、間に沈黙が流れた。

真紅は、首をかしげる。

何？この人・・・可笑的い。女も知らないなんて・・・大丈夫かな？

真紅はそう思ったが、口には出さなかった。

その時、ガサ、ガササツ、と茂みが揺れた。

「！」

少年が、揺れたほうを見る。

灯りがちらほらと見える。

「やばっ・・・」

少年は、素早く木の上に隠れる。

真紅の口を塞ぎながら。

「ふぐぐ！？ふぐぐ！」

真紅はわけの分らないまま、叫ぶ。

「黙れ。殺されるぞ」

少年が声を押し殺して言う。

「！」

真紅の体がその言葉を聴いて、止まった。

が、すぐに後悔の念に襲われた。

なんで？あたし・・・死にたいのに・・・。

何で、止まってるの？

可笑的いよ・・・もしかして・・・まだあたし・・・

「・・・嘘」

真紅は、すぐ傍にいる少年にも聞こえないようなとても小さな声で

言う。

「何か言った？」

真紅は首を左右に振る。

少年はそれを見て、「そうか」といつてすぐに、灯りの方を見る。

ナンデ？

真紅は、硬直した。

今のは、真紅の声では無い。

似ているけど違う。

もっと、冷たい、押し殺したような声。

真紅は、上を見る。

ゾクッ！と、背筋に冷たいものが走る。

真紅が見たのは、とても冷たい、怖い顔であった。

眼には光は無く、ただ、赤く・つまらないものを見るような眼であり、一つ一つの動きは、まるで何かを切っているかのように、動いている。

大きなフード付きの、黒いマントの下に、赤いタンクトップと、赤くベルトが付いた、かなり、だぶだぶな長ズボン。

真っ赤なほど赤く、長い髪。

髪についている、小さな鈴が、風に揺られ、リンツと、鳴る。

危ない。

真紅は、一瞬でそう感じ取った。

しかし、今は逃げられない。

「ダイジョウブ・・・イマハオソワナイカラ」

少女が冷たい声で言う。

「えっ・・・？」

「イマハオソワナイ・・・でも、次は・・・覚悟しておくんだね」

少女・・・いや、よく見れば少年が真紅の前に一瞬で現れそう言った。

「誰？」

真紅はこの状況の中でも、名を聞いた。

「・・・ボクは、グレン。この世界をいずれ支配するものだ」

少年　グレンは、薄く笑うと、消えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真紅は一気に体の力が抜けたのが分かった。

「どうした？」

「・・・・・・・・・・・・・・なんで・・・・も・・・・無い」

真紅はそういったものの、ひどく動揺していた。

少年は、心配そうな顔をした。

それに気づいた、真紅は「大丈夫だよ」と小さく言った。

灯りもようやく言った頃、少年は言った。

「今日は、家に来い。オマエ・・・精神的に危険だから」

精神的というのは、今の真紅にピタシの言葉であった。

真紅は、ひどく動揺していて、動けはしない。

というより、気を失いかけていた。

「はあ~~~~~」

少年は、大きなため息をつく、真紅のほうへ向いた。

今の真紅は、まさに「壊れた人形」であった。

少年は、真紅を抱きかかえると、またフードを深くかぶり、木をわたり、家に向かった。

ガチャ、と街角の少し古びた家のドアが開かれる。

「ただいま・・・」

少年はぶっきらぼうに言う。

「おっ、おかえり〜！キセ！」

「・・・やっと帰ったか・・・遅かったな」

「ホントだよー！捕まっただかと思っただじゃん！・・・ありい？」

家の中に居た4人の少年は、少年 キセのドアを開けた音により、いつせいにドアの方を見た。

そしてその中の一人、がキセが抱いている、少女 真紅に気づいた。

「・・・おおよ？誰？コイツ・・・まさか、浮気！？オレという存在があらうがー！！」

「なんでだよ」

キセは、飛び掛ってきた少年 ミゼルを、ピンツと、でこピンで弾き飛ばす。

「うう！！この浮気モン！」

「・・・キセ、誰だ？」

「・・・さあ？さつきあったばかりかし。ただ、男じゃない」

「・・・？男じゃない？どーいうこと？」

「さあ？」

中に居た少年4人は、顔をしかめる。

キセは、相変わらず、ぶっきらぼうに言う。

そしてキセは、近くのソファーに、真紅を置いた。

その時、なぜか、ソファーから飛び出していた、針金に真紅の胸元の服が引っかかった。

「・・・？」

キセはそれに気づいていなく。

横に寝かせようとする。

ビリビリビリッ！と、真紅が起きていたら、やばいことになりかねない音が部屋に響いた。

「あっ」

少年 レージが、「やっちゃった」という顔をする。

「！」

キセは、思わず眼を大きく開けた。

「どうした？」

少年　ナキアが聞く。

「いや・・・これ・・・薔薇の・・・あざ・・・？」

「薔薇のあざ？」

その瞬間。

ブワッ！

と、辺りを輝く赤いものが覆った。

「・・・薔薇の花びら・・・！？」

その瞬間、薔薇の花びらが一斉に消え、中から赤く光る、神秘的な小さな少女が現れた。

『こんばんは・・・我が主人の秘密を知った者』

少女は、につ、と笑って言った。

「我が主人の秘密！？」

『そうです。私の主人・・・真紅様は、人間ですが、人間ではありません。そんな。そう、例えて言うならば・・・「ドール」・・・「生きた人形」です』

「生きた・・・人形？」

『そうです。この力は、真紅様のお父様・ミゼラール様が埋め込まれたものです』

「父親に・・・」

『このあざは、その証拠』

少女はそう言うと、すうつ、と消えていった。

その刹那、真紅は目を覚ました。

そして・・・。

「！？・・・み・・・見た？・・・スライム・・・を・・・？」

キセはコクリと頷く。

「　　つつ・・・」

真紅は言葉を一瞬失った。

悲しみに満ちた顔であつた。

「スイラーム……」

真紅は眼をギュツと、瞑つた。

そして、

「お願い……忘れて……」

真紅の眼からは、透明な雫が落ちた。

「お父様……なんで、あたしだけ……こんな「不完全」なの……？」

真紅はポツリと言つた。

そして、真紅はとうとう泣き出した。

「お父様……なんで？お父様……」

そう小さく何度も呟きながら。

そのとき、真紅の前に手が差し伸べられた。

「泣くなよ」

キセであつた。

「そうそう！人生明るく！」

異常に明るい少年　ミゼル。

「そーだよ。ほら、食べる？」

お皿を持った、

レージがスープを差し出す。

「これうまいよ、絶対元気出るって！」

ミゼルまでとはいかないが、明るい少年　ナキア。

「泣いてちゃ、ダメ。明るくいかなきゃ」

この中で、キセの次にしっかりしている少年　ルイーゼ。

「あっ……」

真紅はいつのまにか、涙が止まっていることに気づいた。

真紅は服で涙を拭い、5人のほうを見る。

「……ありがとう……」

「どういたしまして」

ルイーゼが軽く、挨拶をする。

「でもさ、お礼に・・・いいよね？」

ミゼルが、おいしそうなものを見るような目で真紅を見た。

「？」

「別にいいんじゃない？」

「そう？じゃあ・・・」

ミゼル達が、真紅の周りに寄ってきた。

「いったただきまゝす」

5人は、真紅の頬にキスをした。

「うわっ！おいしーい！」

「うん・・・すごいじゃん」

「え？え？ええ！？」

真紅は何がなんだかわからなかったが、キスされたことはしっかり覚えていた。

一体何なの！？この人たちいゝゝゝゝ！！！！

第一編 1・1（後書き）

ちなみに、「グレン」は、「グ」にアクセントをつけて
・
「グレン」と呼んでください！

1 - 2 (前書き)

~~~~~  
書くの遅すぎて、眠い・・・

何なの！？この人たちはあ！！！！

「んっ！うまかった」

とミゼル。

「うん。今までの中で一番だね」

レージ。

「そだな」

とキセ。

「おいしー！！」

とナキア。

「すごい・・・黄金果実」の中でも、レベル高いほうじゃん？」  
ルイーゼ。

「・・・お・・・黄金果実？」

真紅は顔を真っ赤にしながらも、聞く。

「うん。この世界、「オーリエン」には、黄金果実と言って、とても甘くておいしい、生気があるんだ。それを黄金果実っていうんだ！この黄金果実の上位ランクには、貴族とかのお偉い人方しかないんだけど・・・人間界って、凄いなだね！というわけでもっと食べさせて！」

「え？」

真紅は飛び掛ってくる、ミゼルに驚いた。が、

「やめろ。大体コレはオレが見つけたんだ」

キセがミゼルの首を掴んで言う。

「えーーーーーーーー！！？独り占めはダメなんだよーーーーーーーー！！」

「オマエにだけは言われたくない」

「そうだよ、ミゼル。人疑義が悪いよ」

「ちーーーーーーーーーーーーーーーーじゃあ、今度貸して！」

「さあね」



キセが、薄く笑いながら言う。

「・・・・・・・・・・で、お取り込み中悪いんだけど・・・」  
真紅が、話を遮った。

「あたし、元の世界に帰りたいんだけど・・・」

「なんで？」

キセが聞く。

「えっ・・・だつて、ここじゃあ・・・」

「無理」

と無表情で、キセ。

「うんうん」

腕を組んで、ミゼル。

「そうだよ」

にこやかに笑いながら、ルイーゼ。

「嫌だよ」

口を尖らせながらナキア。

「僕らを置いてく気？」

涙目で、レージ。

「えっ？と・・・言われましても・・・」

真紅は戸惑う。

ていうか・・・そう言われましても・・・。

「っーか、あの世界のどこが良いんだ？」

唐突にキセが言った。

「えっ・・・・・・・・？」

真紅は、少し困った。

「別に・・・・・・・・でも、あたしが本来居る場所だったから・・・  
お父様の行方も捜してるし・・・・・・・・」

「で？それで？もしかして、んだけ？」

キセがつまらなそうに言う。

「・・・お父様を探してる」

「ふーん・・・つまんねえ・・・人生」

「お父様を探してるのは、あたしだけじゃないんだから。雛桜ひなぎくだつて、青月菜あおづきなも赤月菜あかづきなも・・・それに・・・幻影草げんえいそうも・・・みんなを侮辱しているようなものよ」

真紅は、キツ、とキセを睨む。

「で？」

「キセ・・・オマエいつも納得行くまで、聞き返す・・・悪い癖だよ」  
キセはルイーゼの方を少し向いた。

「だってよ、つまんないじゃねーか。ただ、人探しのために人生費やすのつて。なんだか、しんねーけど、オレだったら探さないで、今を生きるぜ？」

キセはルイーゼに、言い返す。

まあ、確かに人探しのために人生費やす人は珍しいだろう。

きつと、1ヶ月・・・せめて、1年もかかれれば諦める。

諦めない人は別だが。

「でも、あたしたちには、お父様の記憶は無い。有るとしたら・・・優しくて暖かい人」ってことぐらいなの。それに見つけたら言いたい・・・」

「なんて？」

ミゼルが珍しく真剣に聞き返す。

「なんで、こんな「不完全」なの？つて・・・」

「・・・ところでなぜ、不完全だと分かるの？」

ルイーゼが、本を持ちながら言った。

真紅は、ぐっ、と言葉に詰まる。

「そ・・・それは・・・」

「良いじゃん、別に答えたくなければ」

キセが、無愛想に言う。

「どうせ、つまんねーことなんだし」

今まで我慢していた、真紅がキレた。

シュツ、とキセの目の前を赤いものが猛スピードで通り過ぎた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何？」

「何じゃない、アナタ・・・・・・・・残酷」

「残酷？そうだな、その通りだよ。で？これはなに？」

キセが、壁に突き刺さった薔薇の花びらを指差す。

真紅は、肩にかかった髪を払うと、言った。

「あたしの・・・・・・・・術。まあ・・気にしないで。すぐ見れなくなるから」

真紅は、右手を仰向けにし、胸の前に持ってきた。

すると、ブワッツ、と一斉に薔薇の花びらが飛んできた。

「うわっ！」

キセ以外の4人は、目を覆い隠した。

そして、しなやかな薔薇の花びらは、一気に凶器となり、キセに向かって飛んできた。

が、バシュツ、と全ての薔薇の花びらは粉々になった。

「剣・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「そう、コイツは雷龍だ」

キセはそう言った。

雷龍とは、取っ手に大きな黄色い宝石が埋め込まれた、キセの腰ぐらゐの高さの剣である。

「へ・・・・・・・・スィラーム！」

真紅は叫んだ。

すると、神秘的な小さい少女が出てきた。

『何でしょう、ご主人』

「スィラーム、チェンジ・・・・出来る？」

真紅は、薄く笑いながら言う。

『おまかせれ、では何にでしょう』

スィラームは、敬礼みたいのをする。

「じゃあ・・・アレ」

真紅が指差したのは、キセがもっている剣であった。

『アレですか？お任せください』

スィラームはそう言っていると、赤く光り始め、気づいたときにはもうキセの持っている剣に変わっていた。

「なっ？」

「どっ？スィラームのチェンジはあ？」

キセは、呆氣あつけに取られた。

と、真紅は可愛らしい声で笑い始めた。

「あはははっ！やっぱ、この瞬間大好き！だって、皆かなり驚くんだもん！」

真紅はしばらく笑っていたが、とうとう、先行で飛び出していた。

驚いていて、動けなかったキセだが、間一髪で避けた。

だが、真紅は近くにあった木を使って、キセのいる方向へ飛んで来た。

「くっ・・・・・・・・」

キセは、空中で真紅の剣を抑える。

キイイイインツ、と高い音がする。

二人は同時に、地面に着いた。

その刹那の時間に、真紅は叫んでいた。

「薔薇の刃よ、相手を切り刻め！」

その瞬間、扉が現れたときのように、魔法陣が現れた。それも今までの中で一番大きいというほど大きい、魔法陣。  
そして、ゆっくりゆっくり・・・しだいに速く、魔法陣の外側が回る。

その時、ものすごい量の赤い刃がキセに向かって、飛んできた。

「キセ！」

4人は叫んだ。

だが、ルイーゼは見つけた。

真紅が小さく呟いているのを。

3人には聞こえなかったが、ルイーゼに聞こえた。

「そして、その直前で消え去れ」と。

真紅はもとも、相手を傷つける気など無かった。

ただ、あいてと遊びたかったただけであった。

薔薇の刃が直前まで来たとき、キセは1歩引いた。

それは、この世界に来て、初めてだったといえよう。  
その瞬間。

さあああああああああああああああ

見事に、薔薇の刃は碎け散った。

そして、しなやかに散っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キセは状況が分からなかったが、ようやく分かった。

自分が助けられたと。

「はああ~~~~」

キセは大きくため息をする。

そして、キセは雷龍を消す。

「負け。オレの負け」

真紅は、スイラームを自分の体に戻す。

そして言った。

「つまらない」

いや、言おうとした。

「楽しかったよ」と。

しかし、今。真紅の声では無い、冷たい声が聞こえた。  
バツ、と真紅が振り返る。その刹那の時間。

グレンは、真紅の首を掴んで、持ち上げた。  
グレンの方が少し背は大きい。

なので、ほんの少しだが、真紅は宙に浮かんだ。

「ケホッ！く……くるしィ……」

真紅は、苦しそうに言う。

「キミって、本当に馬鹿だね。殺しちゃえば良いんだ。こんなクズ」

「ウウ……い……いやぁ……」

真紅は、苦しそうに顔をしかめながら言う。

「あつそ。まあいいや、ボクは食事が出るだけでも」

グレンはそう言って、真紅の唇に自分の唇を押し当てた。

「ふうっ！？」

「！」

キセ・その他の仲間は驚いた。が、一番驚いたのは真紅本人である。  
う。

グレンは「食事」と言っていた。

そう、グレンの食事は、生気を吸うことであつた。

それが、「黄金果実」であるならば、なおさら食べなくなる。

グレンは、しばらくしてから、真紅から離れた。

「ご馳走様。おいしかったよ、とても。それじゃ、また。……そう

そう、コレ・言っとくよ」

グレンは紅蓮の炎に半分体を入れながら言った。

「キミの父親は、偶然キミを「不完全」にしたんじゃないくて、最初  
から「不完全」にするつもりだったんだよ。計画に書いてあった」

ズキンッ

心が痛んだ。

「え……？嘘………お父様が……？」

「嘘だと思うなら聞いてみるといい。どこにいるかは教えられないけどね、じゃっ」

グレンは、炎の中に消えていった。

夜、真紅は一人、池の場所に居た。

ここは、最初にずつといた場所。

真紅は池に移っている、三日月を見ていた。

これは、完全なもの。

だけど、欠けている。

満月には届かない、三日月。

ほろり、と雫が落ちた。

透明な、雫である。

その雫は後から後から溢れ出してくる。

「う・・・うう・・・お父様・・・酷い・・・なんで・・・なんでえ  
！！」

真紅は、地面にへたり込んだ。

もう、泣いている意味さえも判らない。

「真紅」

突然、後ろから声がかかった。

キセであった。

真紅は、少し後ろを向いた。

キセは眼を赤くしている、真紅に驚いた。

「大丈夫か？」

キセは心配そうに、手を差し出す。

しかし、真紅はその手を無視して、キセに抱きつく。

「キセ・・・なんで・・・？お父様はなんであたしを・・・？」

真紅は決壊したダムのように涙があふれ、もうどうにもすることが出来ないで居た。

「・・・判らない」

キセは、真紅をなだめてあげる事しか出来ない。

その間にも、真紅は泣き続ける。

しばらく、この状態が続いた。

キセはようやく落ち着いた、真紅を強く抱きしめる。

「大丈夫。皆ついている」

キセは呪文のように繰り返す。

真紅は、うん、と肯いている。

しばらく、真紅は黙っていた。

そして、唐突に言った。

「キス、していい？」

「はあ？」

キセは呆気にとられたが、「しょうがないなあ」という顔をした。

不完全な三日月の夜。

二つの影が、一つに重なった。

しかし二人は知らない。

その裏では、今、大変なことが起ころうとしている。



1 - 2 (後書き)

なんか、グレンと紅蓮が続けて出たよね？ダジャレじゃないからね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4257a/>

---

異世界・オーリエン

2010年11月16日08時26分発行